

## 8. 越前市三田村家・大瀧神社歴史資料調査

藤村昂輝

### 1. 三田村家文書の概要

福井県越前市の旧今立町岡本地域には、岩本・不老・大瀧・定友・新在家からなる「五箇」と呼ばれる5つの村が存在し、大瀧神社の神郷として室町時代より製紙業が盛んに行われ、大瀧神郷紙座として紙の生産・販売に関する様々な特権が与えられていた。天正3年（1575）には織田信長の一方向一揆征伐により神郷の拠点であった大瀧寺が焼失するも、従来通りの特権が認められ、紙の一大産地として存続した。『和漢三才図会』や『経済要録』など様々な史料から、江戸時代を通して五箇の紙が高い評価を得ていたことが窺える。

この五箇における紙の生産・販売において支配的な地位にあったのが大瀧村の三田村家である。縁起によると、その祖である道西掃部は南北朝時代に越前守護であった斯波高経より紙漉きの技術を認められ、奉書紙職の安堵と紙束の紐に捺す奉書印の使用が許された。その後の代においても、織田信長からは七宝印、豊臣秀吉からは桐印の使用が許されたという。江戸時代には、同家は福井藩の御紙屋筆頭を務め、さらに幕府からの注文を受けて御用紙を納入したことから五箇で唯一「幕府御用達の奉書屋」として認識されていた。また、福井藩紙会所の判元も務めており、紙の改めや運上銀の収集を担っていた。

このように五箇の製紙業に長らく携わってきた三田村家に伝わる文書や記録は、大正9年（1920）頃に牧野信之助によりはじめて整理され、八種類に分類された。このうちの三種類が大瀧神社の来歴を証明する史料群として、大瀧神社を県社へ昇格させる過程で神社に奉納された。この際に三田村家伝来の史料は、神社所有となった大瀧神社文書と三田村家に残った三田村家文書に二分されるに至った。三田村家文書はさらに分割され今立町となり、町村合併で越前市所有となる。この度の調査は三田村家に残った個人蔵の文書とその他の歴史資料も含め、全体像を把握することを目指している。

### 2. 調査参加者と日程

竹中友里代（特任講師）、芝野有純（博士前期課程2回生）、前田遼太（4回生）、藤村昂輝（3回生）、岩本悠梨、武田知奈（以上2回生）、北嶋阿弥、小島慧音、竹井優太、橋本唯、渡部凌空（以上1回生）ほか1名、計12名が調査に参加している。

調査日程：2021年 第1回 7/9～11、第2回 8/28～29、第3回 10/29～10/31

第4回 1/6～7、第5回 11/20～21、第6回 11/27～28、第7回 12/11～12

第8回 12/18～19、第9回 12/25～26

### 3. 調査概要

三田村家・大瀧神社歴史資料調査は、越前市が主体となり4か年計画で2020年に開始し、2021年7月より府大生が参加した。主な作業内容は、デジタルカメラを用いた古文書の撮影、史料目録の作成である。あらかじめ芝野・前田両名が作成した「調査マニュアル」に沿って、これらの作業を行った。古文書の撮影は基本2人1組または3人1組で行い、文書の角度や皺などに注意した上で、より視認性の良い画像となるよう努めた。現時点では、越前市所有分の1514点のうち607点、全体の約40%の撮影が終了している。また、目録の作成では、作成年代・原題・差出・宛所などの項目に法量・紙数などを入力し、個人所蔵分のうち351点をデータ化している。その他既存のカード情報もデータ入力している。

この調査では作業内容・反省点を日誌に記録し、作業の重複やミスの防止に活用している。また、撮影データの整理やハードディスクへの保存、進捗状況の整理・記録化も行っている。

今後の調査では、文書番号の整理や番号ラベルの作成、ラベル貼付など様々な作業が予定されているが、現場で臨機応変に対応できるよう努めたいと思う。

#### 参考文献

越前市市史編さん室『文化財からみる越前市の歴史文化図鑑』越前市、2016年  
福井県編『福井県史 通史編近世二』福井県、1996年



写真1 旧料亭「春駒」での調査風景



写真2 武生公会堂記念館貴賓室での調査風景